
涼宮ハルヒの厨毒

竜志念

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

涼宮ハルヒの厨毒

【Nコード】

N7298W

【作者名】

竜志念

【あらすじ】

いつもどおりの放課後、いつもどおりのSOS団の活動に、何の予兆も前触れもなくハルヒが事件をもってきた。今回は、宇宙人も未来人も超能力者も関係ない。ハルヒ個人の問題だ。そして、それがいちばんやっかいでもある。ハルヒが厨二病にかかりかけていた。文才皆無の人間が思い付きのみで二次作品を書いてみた。

（前書き）

『マンガ、アニメにおける話はフィクションです。実際の人物事件団体、必殺技、最終奥義、武空術、には一切関係しません。そして、必殺技を使わなくてはならないほど世界は荒れていません』

「ねえ、キヨン。あたしかめはめ波が打てる気がする」

いつもどおりの放課後。いつもどおり古泉とボードゲームをしている最中、ハルヒは呟いた。

長門はいつもの positioning で今の発言を完全無視してもってるだけで腕が疲れるであろう分厚さの本を読み進め、朝比奈さんは朝比奈さんで、ハルヒの発言にかなり驚いている。古泉は、いつもどおりの微笑でハルヒの二の句を待っている様子。ハルヒにいたっては俺が何か言い返すのをあからさまに目線で合図している。

なんで毎度俺の役割になるかね。

というか、え？ あいつさっきなんていった？

「か、かめはめ波？」

「そう、かめはめ波。ゴクウにできてあたしに出来ないわけじゃないじゃない！」

「……まさかそれはドラゴンボールの話じゃないだろうな……」

「ん？ 当然よ！ 他人の話を勝手に使ったりしたら犯罪よ？ 分かってるの？」

話が繋がってないぞ！

「だってそうでしょ？ ゴテンだって修行をしないでやったんだから、わたしならビックバン・アタックも余裕ね！」

「いや、ゴテンだってちゃんと修行してたら。それに、あいつらは人間じゃないだろ」

「情報に誤差あり。ゴテンはサイヤ人と人間のハーフ」

目にやたらと迫力を持たせながら、長門はまっすぐに俺を見ている。

「ハルヒちゃんの設定を持ってくるのか……長門」

「そう」

肯定されても反応に困るのだが。

「とにかく！ わたしかめはめ波打つわよ！」

と、いうわけで。

古泉の意見により部屋の中から移動。見晴らしのいいなにもない平原へとやってきた。のは、いいが……

「かゝゝめゝゝはゝゝめゝゝ波ああ！」

何度テレビで確認したのだろう。もはや完璧といわざるをえないほどのキレのある動きでハルヒは動いている。だが、一向に発射される気配がない。

「しかし、まさか涼宮さんが厨二病にかかってしまうとは、機関のほうも大慌てですよ」

急に話しかけるな。息を吹きかけるな。顔が近いんだよ。

「おや、失礼」

そういいながら、半歩俺から間を取った古泉は、いつもと変わらぬ微笑を浮かべながら、

「しかし、本当に大変な自体なですよ？」

「どういうことだ？」

「考えても見てください。涼宮さんの思考自体がこの世界と違っても過言ではないのですよ？ それをつかさどっている涼宮さんの脳内が二次元オウイエイ、妄想こそが全てな脳内になったら、どうです？」

回りくどい言い回しはいつものことだが、それでも事の重大さ俺の頭でも理解できた。

「つまり、このセカイが法則を無視した、お前等が一番恐れていた自体になると」

「そのとおりです。そして、問題はそれほど単純でもありません。涼宮山河もしかめはめ波及びギャリック砲及び太陽拳などをつかえてしまったとしましょう。そのああ意、涼宮さんの中で何でもありだという理解になってしまう恐れがあります。これは、ちょっとし

た恐怖ですよ」

「じゃあ、どうするべきなんだ？ あいつは出来ても出来なくても
けか敵に被害をもたらすのは目に見えてるだろ」

「さあ、それはあなたの仕事ではありませんでしたか？」

そんな仕事請け負った記憶なんて一切ないんだがね。

「そうですか」

それきり古泉は視線をハルヒのほうに向けた。いつもと変わらぬ
微笑が、悔しいが安心材料としてはもってこいだ。長門がなにも俺
に言ってこないとなると、余り危険性は高くないのだろうし、ゆっ
くりと解決することにする。

「みくるちゃんも、なんか出しなさい！ 母乳だせるでしょ！」

「む、無理ですう」

「波あ」

苛立たしげに朝比奈さんに絡んでいるハルヒ。それを目を潤ませ
ながら首を振るグラマラスな朝比奈さん。そのよこでひたすらに頑
張っている長門。長門、キャラが崩壊しかけてるぞ。

そんな俺の思考を呼んだのか、前に伸ばしていた手を下ろし、俺
へと視線を固定させ、こちらに歩み寄ってくる。

俺の目の前だとまった長門は、ゆっくりと、

「あなたも、やる？」

やるか！ 長門さん、本当にあなたキャラが崩壊しますよ！

「涼宮ハルヒの制御空間内。思考判断に誤りが生じている。早急に
手を打つべき」

いつもの無表情へと戻った長門はそれだけ告げて、またかめはめ
波を打ち始めた。

長門、それは分かったが、本当は楽しんでないか？

「ああ、もう！ 全然でないじゃない！ どうなってるの！」

ハルヒの集中力もついに途絶えてしまったらしい。いつの間にかや
ら古泉は新川さんと交代しているし、朝比奈さんは映画撮影のとき
に来ていたミニスカウェイトレス二衣替えしているし、長門はギャ

リック砲の練習になっっているし。

前言撤回。やばいぞ、これは。

「あ、そうだ！ 谷口なら知ってるんじゃない？」

なんでそうなるんだ！

「え？だてあいつ特殊能力ぐらいもってないとかわいそうじゃない？頭悪いんだし」

お前に何か能力あたえられるほうが谷口は悲しむだろうよ。

「じゃあ、森さん！」

あ、一理ある……

「古泉君！森さんと呼んでもらえる？」

新川さんだけど、まあ、今はいいだろ。

「了解しました」

やっぱり声が洪いな……。などと考えている数秒の間に森さん到着。本当に規格外の人だ……

「かめはめ波、ですか？」

「そう！ 私打ちたいのよ！ どうしてもやってみたいのよ！」

「まあ、可能ですけど……」

できるんですか！

「ただ、9800度の熱に耐えられるからだ、大砲を手でうつるレベルの腕力、それを支える脚力がないと出来ませんが、それでもやりますか？」

「……………」

ハルヒ沈黙。わかりやすい動揺の顔というよりもアホとっていいぐらいの驚いている顔が、森さんから背けられ右手でガッツポーズを作りながら、

「やっぱり、人類には無理ね！ 諦めましょう！ だから、皆でア

ニメイトに行くわよ！」

「なんでそうなる！？」

「いいから、レッツゴー！」

朝比奈さんと長門を両手に捕らえ、大またづかづかと歩き出す。

「一件落着、でいいんですね」

「そうですね。あとは涼宮さんにアニメよりも集中できるものを提供するぐらいですね」

誇示済みとはちがう微笑を浮かべている森さんはなんだか、かなり怖い。

「キョーン、早くしないとおこらせるわよー！」

かなり遠くの方から拡声器でも使ったような大声で俺を呼ぶハルヒ。

「じゃあ、行きますね」

「はい。あ、これ、涼宮さんに渡してください」

そういつて森さんが俺の手に封筒を渡した。

「なんですか、これ？」

「涼宮さんと一緒に見てくださいね」

それだけ行つて森さんと新川さんはいつもの黒いタクシーに乗ってかえっていった。

今回の勤労者はいつもどおり長門。と古泉だな。

ちなみに、埠頭の中に入っていたのは、文字だけが書かれた手紙で、内容は至極簡単なものだった。

『マンガ、アニメにおける話はフィクションです。実際の人物事件団体、必殺技、最終奥義、武空術、には一切関係しません。そして必殺技を使わなくてはならないほど世界は荒れていません』

しめの一言は余計なきもするが、それを読んだハルヒはなぜか納得したようで、それっきりかめはめ波の話題は出なくなった。

それから数日後、いつもどおりの午後のSOS団の活動に遅れて登場したハルヒは、扉を開け放つと同時に、宣言した。

「恋愛するわよ！」

ハルヒの左手が大きく前に出されその手には恋愛小説が握られていた。

いい加減にしてくれ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7298w/>

涼宮ハルヒの厨毒

2011年9月16日03時27分発行